





鮮半島南端の加耶地域にも達した。加耶は鉄の供給などでもともと倭人社会との結びつきが深かった。このため高句麗の圧力が加耶へ及ぶと、その緊張が加耶南部を通して倭国へも伝わる。百済が加耶南部諸国と友好関係を結ぶと、倭国も百済と同盟関係を結び、高句麗に対抗する陣営に積極的に加わるようになった。

こうして、百済・加耶が、倭国に軍事的支援を要請するかわりに、鉄などの文物(渡来文物)や鉄器・須恵器・馬匹生産技術者(渡来人)などを贈与する贈答関係で結ぶ倭韓同盟が形成されていく。一方、平和的な国際交易の機会を保証した従来の博多湾交易体制は解体されていったようだ。これとほぼ時期を同じくして、西新町遺跡が終焉を迎え、壱岐の原の辻遺跡からも大集落が解体消滅する。

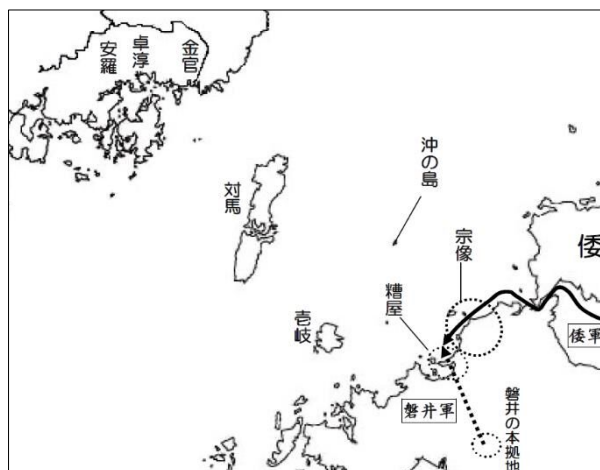


## 2. 磐井の乱と那津官家

### 磐井の乱と糟屋屯倉

『書紀』によると、継体 21 年(527)、天皇の命を受けた近江毛野臣は、新羅に破られた加耶南部の国を再興するため、6 万の兵を率いて朝鮮半島におもむこうとした。これを知った新羅は、かねてから謀叛を企てていた筑紫の磐井に賄賂を送り、この軍を防ぐようにすすめる。そこで磐井は、火・豊の二国にも勢力をはって、海路をふさぎ朝鮮諸国からの使節船を自身のもとに誘い入れると、毛野臣軍の進軍を阻止した。そこで、あらためて物部大連鹿火が派遣され、筑紫の御井郡で磐井を斬り、乱は鎮圧された。磐井の息子葛子は父の罪に連座するのを恐れ、糟屋屯倉を献上し許しを請うたという。

磐井が海路を封鎖し、近江毛野臣の軍を遮った場所は糟屋であろう。北部九州で筑紫君に比肩する力を持つ宗像地域は、その後の首長墓の展開をみても、磐井軍に加わらなかったとみられており、毛野臣の水軍は、宗像海域までは到達できた。糟屋はその先にある。この糟屋で磐井が海路を封鎖したため、毛野臣の軍船は博多湾・玄界灘側へ進むことができなかつたとみられる。磐井の息子の葛子が、父の敗戦を受け、糟屋をミヤケとして献上したのは、ここが磐井の海上封鎖の拠点、すなわち乱の象徴的な場所であり、響灘・宗像海域と博多湾・玄界灘をつなぐ海上の要地だったからだと考えられる。



## 那津官家の設置

磐井の乱以降、『書紀』は安閑・宣化紀に、ミヤケ設置の記事を集中的に掲載している。その多くは西日本、なかでも瀬戸内地域や、磐井の勢力下にあった筑紫・豊・火に偏り、ミヤケがまずは、磐井の乱後の対外ルートの掌握という課題と連動して進んだことがわかる。また、『書紀』宣化元年(536?)5月辛丑朔条には天皇の次のような詔が掲載されている。

筑紫国は、海外諸国からの朝貢があるので、これまでも稲穀を蓄え、凶作や賓客に備えてきた。ここに、各地の屯倉の穀を運ばせ、那津の口(博多湾)に官家を修造する。また筑紫・肥・豊三国の屯倉は、各地に散在して輸送に不便で、緊急に備えがたい。そこでこれらの稲穀を分かち移し、那津の口に集めて非常に備えよ。(要約)

これにより、九州各地のミヤケは対外交通の要衝に置かれた那津官家の管理下に入り、北部九州諸勢力の独自の対外交渉機能も、王権の統括下に置かれるようになったとみられる。ここから、磐井の乱後の九州支配は次のような手順ですすめられたとみられる。

- ① 磐井の乱を鎮圧すると博多湾の入り口の糟屋を抑えるミヤケを置く。
- ② 瀬戸内海や九州を中心に各地にミヤケを設置し、対外交通ルートを確保する。
- ③ 対外交通の拠点である博多湾に特に那津官家を置き、九州各地のミヤケを統括する。

## 3. 百濟滅亡と白村江戦のインパクト

### 隋の成立と「筑紫大宰」

589年、300年近く南北に分裂していた中国王朝を隋が一つにまとめると、周辺諸国に強い態度で臨む。598年、互いに国境を接する隋と高句麗が598年に軍事衝突すると、東アジア情勢は一気に緊迫化した。倭国はこの間の崇峻4年(591)～推古11年(603)、加耶を併呑した新羅に軍事的圧力をかけるため、2万以上の大軍を断続的に筑紫に駐留させており、隋成立の影響は重大な関心事であった。600年には倭五王以来の遣中使を派遣するが、隋との交渉に失敗し、607年に仕切り直しとなる。『書紀』によれば、以下のように、倭国はこの国際情勢の変化に対応し、九州近海の交通監視を強化し、渡来者を来着地で把握・記録する体制を整備している。ここに「筑紫大宰」が登場する。

601年 新羅の間諜を対馬で捕らえ、上野に流す。

608年 「是歳、新羅人多く化来す」

609年 筑紫大宰が肥後葦北津に漂着の百濟僧俗を報告。検問使派遣。

以上は「筑紫大宰」の初見であり、東アジア情勢の緊迫化をふまえ、大王の命を受けた大宰(オオミコトモチ)を那津官家に派遣し、九州諸地域の行政を広域的に監督する体制を強化したとみられる。

### 白村江戦のインパクト

618年、隋は反乱を抱えて滅亡し、唐が成立すると東アジアは再び緊迫化し、警戒を強めた高句麗では大臣が、百濟では王が、政権の反対勢力を排除して、独裁体制をしく。

両国は、対唐・新羅政策でも連携を強化し、また倭国に接近した。この影響を受け、倭国でも蘇我氏が大臣を軸とした独裁体制をしようとし、乙巳の変が起こる。

一方、高句麗・百済に挟まれた新羅は、唐との関係を強化した。こうして660年、唐・新羅連合軍水陸10万の兵により百済は滅亡し、百済復興を企てた倭の水軍は、白村江で663年に大敗北を喫した。668年、唐・新羅によって高句麗も滅亡する。

以上の混乱のなか、百済人を中心に亡命者が数千人規模で渡来し、王権もこれらを十分に把握できない。引き上げた倭人首長層のなかには、朝鮮半島から直接渡来人を連れて本拠地に戻る者もあり(『日本霊異記』)、この頃地方に拡大する仏教寺院には、地方の首長が渡来人を直接受容し創建するものもあったとみられる。敵国に囲まれ、対外的な文化的優位性も喪失した王権は、防衛体制・支配体制の根本的見直しを迫られた。

このなかで、亡命百済人らの協力を得て防衛体制の整備がすすみ、山城・水城の防衛ライン後方には、那津官家の機能を継承・発展させた大宰府の政庁が成立する。

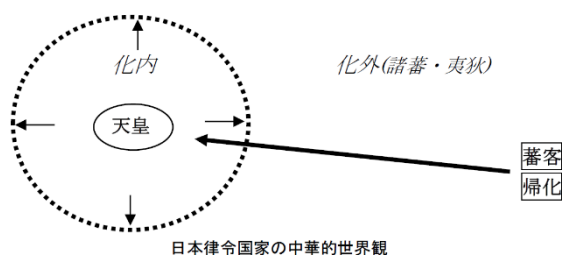


#### 4. 律令国家と大宰府

##### 律令体制と大宰府

支配体制の揺らいだ倭国は、国号を「日本」と改め、唐の制度・体制をモデルに、中華思想にもとづく天皇中心の世界観を築き、天皇とその官が対外関係を独占する律令国家体制を構築した。701年には大宝律令が制定され、757年には養老律令が施行される。

その養老律令の職員令は、大宰府が対応すべき海外からの流入者について、外交使節である「蕃客」と、天皇の民となることを願う「帰化」の二種類のみ規定し、様々な契機で大陸や半島から移動する人々を、全て天皇中心の中華世界に取り込もうとした。「蕃客」や「帰化」申請者は、天皇の威・徳を示すかのような荘厳な客館に安置され、衣食の支給が保証されたが、これも、国家が彼らを閉鎖的な空間へ隔離し管理する一面と抱き合わせの措置であった。その最前線にあって、西海道(九州)全域を統括する大宰府は、地方官司でありながら中央官司に匹敵する官員をそなえ、その職務を遂行した。



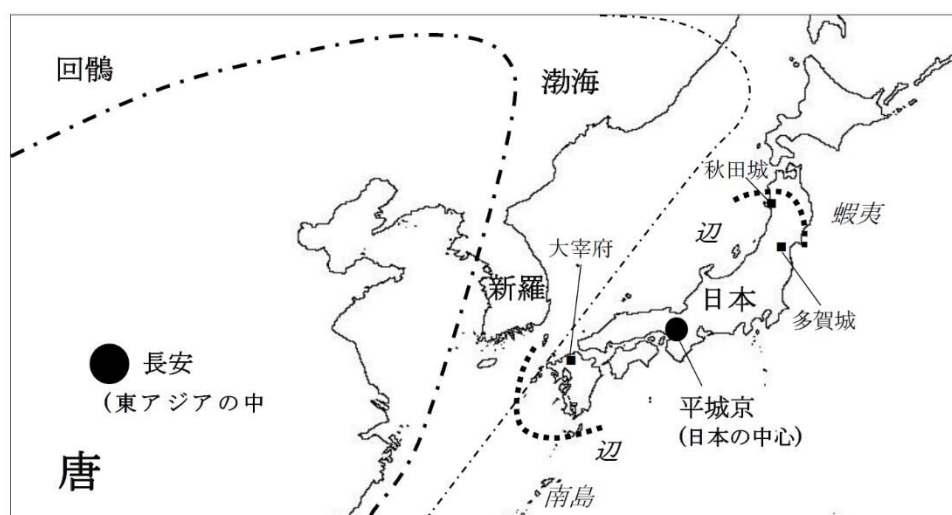
## 国際交易の中心と周縁

律令国家の対外関係独占の姿勢は、国際交易にも厳しく及ぶ。養老令は、国外からもたらされる物品について、官司が優先的に国家必要品を買い上げる先買権を定める。官司先買後に許される交易も、参加者の階層が絞られ、交易当事者間には官が介入して、両者の関係が間接化され管理された。政治的権威と結びつく対外交易の機会を、天皇を頂点とした政治世界の身分・地位に対応して行われるよう、制度化されていた。

この官司先買制は、主に「蕃客」に対する制度として整えられていた。8世紀前半までの日本周辺には、海商がまだ登場しておらず、日本での国際交易といえば外交使節によるものを準備すれば十分であった。「蕃客」は九州北部の「辺」に到着すると、日本の中心地たる都へのぼり天皇に謁見する。「蕃客」との管理交易も、原則、この都の客館において行われ、天皇の都の中心性を国際交易体制でも表現した。

ただし、この体制は、唐と大きく異なる。唐律令は、国際的優位性の保持を目的に、輸入品の官司先買より国内優品の輸出規制を重視していた。つまり唐は、自らの高度な文明を独占・分配し、朝貢国を引き寄せて、国際的・国内的権威を保つ体制であったが、文明の周縁にある日本は、外来の文物を支配層が独占し、それを身分制・国土編成に応じた分配システムに乗せて天皇とその都の中心性を維持する体制であった。都の貴族たちが唐由来の文物を盛んに求めたのも、日本の中心にある彼らが東アジアの周縁にあることを自覚していたからである。

列島古代の中心的な権力が、九州の支配・管理に絶えず強い関心をはらったのは、このように九州が地理的に東アジアの中心に近く、列島の政治的中心の優位性を相対化し脅かす潜在能力を備えていたからである。したがって、9世紀に国際商人の時代を迎えると、日本中央にとって、九州の管理は再び重要な政治課題となっていく。



日本の中心—周縁と東アジアの中心—周縁

### 【参考文献】

- 田中央生『国際交易の古代列島』（角川選書、2016年）
- 田中央生『渡来人と帰化人』（角川選書、2019年）